「山深い学舎」（抜粋）　山口則子
昭和27年　登小学校開校当時の学校生活
『登小学校開校20周年記念　あゆみ』掲載

木の香り漂う中で開校式を迎えたのは、私が2年生の昭和27年11月11日でした。この日は20センチぐらいも雪が降った翌日で、白い綿帽子をすっぽりかぶったような…この時の写真は長い間、職員室に飾ってあったのを記憶しています。

その年の春、1年間通い慣れた網走小学校から日吉校へ転校して、1学年1学級しかないのに驚いたものですが、その秋に登校ができて日吉校で担任していただいた新海先生とともに新しい学校に参りました。ですから他の学校から来てもじもじしている子どもたちの中で、家に帰ると両親がいる時のように、新海先生には学校の中で自分の親のような気持ちだったので、何の気後れもなく職員室に出入りしたものでした。

ところが勉強の方は、3学年が一緒に学ぶことになり、始めのうちは上級生が下級生の勉強に気を取られ、「お前たちも1年生になりたいのか」などと叱られ、今にして思うと教える先生も大変苦労されたことと思います。

開校当時の校舎の前は一面の湿地帯でしたので、この谷地（やち）にエゾサンショウウオがたくさんおり、休み時間などに捕まえてきては水飲み場の蒸溜皿に何匹も入れておき、下校の時間になって「もういいかげんに放してこい」などと言われ、水気のあるところにまた放しに行ったものでした。

母校というこの暖かい響きのある言葉とともに、小さな学舎での数々の思い出の中に、今は故人となられた新海先生があります。先生は書道に特に熱心で大変厳しく教えられ、「書けば必ず上達するものだ」と良く言われました。今でも筆を手にするたびにこの言葉が懐かしく思い出されるのです。

また、その頃の暖房が薪ストーブでしたので、父兄が小切りにしてくれたものを私たちが小屋に運んだりいたしましたが、こんな作業の後に先生の野菜畑で収穫したそら豆の塩茹でをみんなで食べた、あの何とも言えない満足感、秋の学芸会の頃、山形の鈴木先生の郷里から送られてきた栗が大変珍しく…といったように家庭的な伸び伸びとした毎日でした。

また、その頃の楽しかったことの1つに教育映画を見せてもらったことがあげられます。バス停まで5・6年生がリヤカーで迎えに行き、機械やフィルムなどを積んできたものです。その映写機の操作に男子生徒がたいそう興味を持っていたようでした。

特に冬期間の通学は厳しい自然に鍛えられ、低学年の生徒でもスキーが上手で、もちろん今のような立派なスキーを持っている生徒はいませんでしたが…ナタで板を削り、炭焼き窯で蒸して先を曲げただけのスキー、そんなスキーでしたが誰も不満を持たず元気に登校し、時には始業時刻を遅らせてもらってストーブの周りでズボンを干したりしたものです。どれもこれも今は懐かしい思い出ばかりです。（略）

＊注：教育映画の上映は、昭和29年7月1日の登小学校への通電以降。登地区全体の通電は、昭和29年12月22日の福山・日吉・吉野・登地区電気導入組合設立時から。
＊注：薪小屋は昭和29年11月6日完成。